

列王記第一 18 章 21 節 「バアルとヤハウエ」

1A 三種類の人

2A バアルの預言者

1B 目立つ動き

2B 役立たず

3B 焦り

4B 憐憫

3A 主の預言者

1B 大胆さ

2B 静かさにある力

3B 従順にある徴

4A よろめく民

列王記第一 18 章 21 節を開いてください。私たちは聖書通読の学びで、列王記第一 17 章まで先週来ました。北イスラエルから出てきた預言者エリヤの生涯を学んでいます。イスラエルの歴史の中で、またある意味で人類の歴史の中で、画期的となる出来事を読みます。それは、イスラエルの神ヤハウエの預言者と、異邦人の神バアルの預言者との対決です。

私たちは以前、主の御名によって、武装した巨人ゴリヤテに対峙したダビデの姿を読みました。そこで私たちが知ったのは、物理的な力に対して、主の御名で対抗することでした。パウロが、「私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。(2コリント 10:4)」と言いました。主イエスが再臨される時に、世界の軍隊はあらゆる武器をもって神とキリストに戦いを挑むのですが、イエス様が持っておられた武器は、ご自分の口から出てくる剣でありました。神のことば、また主の御名による祈りが、私たちの前に立ちはだかる物理的な障壁を打ち壊すことができるのだ、ということです。私たちの前に立ちはだかる問題は、祈りと御言葉によって立ち向かうことができます。

そして私たちがこれから読む、エリヤとバアルの預言者との対決は、物理的な力ではなく、目に見えない力、他宗教や偶像に対して、主の御名で対抗することです。

先週、私の友人の宣教師から相談を受けました。信仰を持ちたいけれども、自分の亡き夫の仏壇があるので、それを手放すことができないという女性がいる、というものでした。なぜこの悼み悲しみをクリスチャンになるとやめなければいけないのか？という質問を受けたそうです。私は、慰霊と追悼の違いを説明しました。「神と人との関係は、ちょうど結婚関係と同じで、一対一の親密な交わりである。それを夫婦のように肉体で行なうのではなく、霊において行なう。したがって、死者の霊に対して祈ったり、供え物をすることは、天地を創造した神に対する裏切り行為、不倫と同じ

であり、真実な愛に傷がつく。」と言いました。そして追悼について説明しました。「慰霊をするのは、ちょうど、自分の寝台に自分の妻だけでなく、他の女性を連れてくるのと同じだ。けれども追悼は、その女性を居間にお連れするようなものだ。亡くなった人のことを追憶し、そしてその良き思い出を下さった、命の神に感謝するのである。」こんな内容を書きました。

その方は亡くなった夫の家族から、仏壇の管理をするようかなり強い圧力をかけられています。ご自身の悲しみもさることながらその圧力があるので、どうしてもやめられないという苦悩を抱えておられました。個人的なことなので話すべきか迷いましたが、けれども、クリスチヤンの家庭ではないところで育った方であれば誰もが通っていることだと思しますので分かち合いました。

この圧力は、日本の古き歴史を辿る先祖供養にあります。具体的にはどこから始まっているかご存知ですか？江戸時代初期です。檀家制度があります。檀家制度は、キリシタンを日本から一切排除するために作られたものです。ウィキペディアからの説明を引用します。「寺請制度(=檀家制度)の確立によって民衆は、いずれかの寺院を菩提寺(ぼだいじ = 位牌を収めている寺)と定め、その檀家となる事を義務付けられた。寺院では現在の戸籍に当たる宗門人別帳(しゅうもんじんべつちょう)が作成され、旅行や住居の移動の際にはその証文(寺請証文)が必要とされた。各戸には仏壇が置かれ、法要の際には僧侶を招くという慣習が定まり、寺院に一定の信徒と収入を保証される形となった。」明治維新によってこの制度は廃止され、さらに敗戦によって民主主義になったにも関わらず、法律的にはこれら的一切を全く遵守する必要がないのに、それでも私たちの心を縛っています。

そこには真実な、真心からの親戚付き合いがなく、義務や強制、また死んだ人の残した財産を巡る醜い相続争いしかないのを知っています。生きている時に、普段から互いに連絡を取り、感謝の念を言い表して、その絆を深めることもできるのに、恵みではなく強制でしかない関係になっているのは、それがキリシタン禁圧のための取り締まり制度だからです。

したがって私たちがキリストを信じる者として対抗しなければいけない力がいかに強く、大きいかがこれで分かるかと思えます。北イスラエルは、バアル信仰の制度を国の方策として定めていました。そこに、バアルの本拠地であるシドンにも近いカルメル山で、相手は 450 人の預言者とこちらはたった一人のイスラエルの神の預言者との対決であったのです。エリヤが相当な圧力の中で、神を信じる信仰によって進み出ていることが想像できるかと思えます。

1A 三種類の人

この対決場面には、三つの種類の人々が出ます。今話したように、一つ目と二つ目は、バアルの預言者とヤハウエの預言者エリヤです。三つ目は、そこにいる大勢のイスラエル人です。エリヤが、「あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。」と訴えています。実は、これら大勢の、どっちつかずの人々がイスラエルの共同体によって致命的な傷をもたらしていました。私

は、神道を信奉している方に福音を話したことがあります。彼女ははっきりと、自分の信じていること、なぜ祭りを行なっているのかを言葉で説明することができました。それで私は、彼女の言った言葉に対して、福音の希望を弁明することができました。

けれども、一般の大勢の日本の方は、宗教は何か聞かれると「無宗教」と答えます。このように答えられるのが、一番困ります。なぜなら、無宗教ではないからです。実際は多くの宗教を少しずつ信じています。その根底には神道に近い世界観を持っています。けれども本人の思いの中では、別に宗教をしているのではないと思っています。このように自分が何を信じているのかを明確にすることをしていないので、キリストを信じることも明確にすることができません。

そして、これが教会の中で起こることもあります。ラオデキヤにあった教会に、イエス様がこう言われました。「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。(黙示 3:15-16)」ラオデキヤの教会では、自分が富んでいる、自分には足りないものがないと思っていた高慢が、そのなまぬるさを作っていました。そこでイエス様は、「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。(3:19)」と言われました。

2A バアルの預言者

それでは、双方の対決を見ましょう。エリヤの提案に、バアルの預言者は「それがよい」と全面賛成でした。それは、それぞれの神の祭壇を造ります。そこにたきぎをくべて、その上にそれぞれ一頭のほふった雄牛を載せます。そこに火をつけてはいけません。自分の神の名を呼び、火をもって答えるのであれば、本物の神であるというルールです。

そこで、双方の預言者が行なったことを比べることは、私たちにとって有益です。何をもって、私たちの礼拝や信仰の姿勢が、まことの神に向けられているのか？これをはっきりとさせることができます。

1B 目立つ動き

一つは、「大げさで、目立つことを行なう」ことです。26 節を見てください。「そこで、彼らは与えられた雄牛を取ってそれを整え、朝から真昼までバアルの名を呼んで言った。「バアルよ。私たちに答えてください。」しかし、何の声もなく、答える者もなかった。そこで彼らは、自分たちの造った祭壇のあたりを、踊り回った。」踊りまわっています。自分たちの神を呼び覚ますために、このように大げさなことを行ないます。人目に引くようなことを行ないます。これはまことの神に対する礼拝ではなく、異教の神への礼拝です。

祈るときも同じです。イエス様が異邦人の祈りとまことの神への祈りの違いを説明されました。

「また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたが願う前に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。(マタイ 6:7-8)」

もちろん、踊りまわること自体が悪いことではありません。ダビデは主の箱をエルサレムに運び入れるときに、その前で踊りました。しかし、彼は神の真実に触れて、そのすばらしさに感動して、それでかいっぱい踊ったのです。踊りまわったから、神の霊が働きかけたのではなく、神の御霊が彼の心を奮い立たせたから、彼は踊ったのです。

もし私たちが、主からの恵みや真実を知ることなしに、ただ漠然と、ただ目に見えること、ただ目立つことをしているのであれば、その対象は、たとえイエス様に対してと言っても、実はただ熱くなっているだけなのだ、ということが出来ます。

2B 役立たず

そしてバアル信仰の特徴の二つ目は、「役立たず」であります。エリヤが皮肉を込めて、こう言っています。「真昼になると、エリヤは彼らをあざけて言った。『もっと大きな声で呼んでみよ。彼は神なのだから。きっと何かに没頭しているか、席をはずしているか、旅に出ているのだろう。もしかすると、寝ているのかもしれないから、起こしたらよからう。』(1列王 18:27)」役に立たないのです。ひたすら祈ってはいるのですが、全くその答えがない状態です。

ヤロブアムの偶像礼拝の時もそうでしたが、彼は自分の息子が病に伏して、預言者アヒヤのところに密かに妻を送り込みました。いつも拝んでいる金の子牛とその祭司のところに行けばよいのに、肝心のことになるとそこには行きません。なぜなら、役に立たないことを知っているからです。

私たちの信じているイエス・キリストの神は生きておられ、必ず祈りを聞かれます。「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでになえられたと知るので。(1ヨハネ 5:14-15)」私たちの祈りは生ける神に必ず届けられているという確信が、与えられます。空を打つような祈りではなく、必ず聞いてくださっている方がおられることを私たちは知っています。もちろん、自分が思ったとおりの答えが返ってくるわけではありません。けれども、自分の思いを超えてその願いをかなえてくださることを知っています。

私が生涯の中で覚えているのは二つの祈りです。一つは小学生の時にてるてる坊主に祈ったときです。まったく答えがありませんでした。もう一つは、大学生になって、クリスマス礼拝の後、自分の部屋で独り祈ったときです。こう祈りました。「私は生まれてから、あなたを無視して生きてきました。ごめんなさい。」そうすると、頭のとっぺんから足のつま先まで、愛のシャワーが突然降っ

てきたようになりました。こんな高慢で醜い自分を、神がすべて受け入れてくださったことを教える答えでした。これが、生きている神に対する祈りです。

3B 焦り

そしてバアルの預言者たちの三つ目の特徴は、「焦り」です。28 節、「彼らはますます大きな声で呼ばわり、彼らのならわしに従って、剣や槍で血を流すまで自分たちの身を傷つけた。」異教の儀式で自分の身を傷つけることがよくありますね。ここでバアルの預言者は、一向に答えがないので、気が狂わんばかりに自分の身を傷つけました。そこにあるのは焦りでした。一向に答えがないことに対して焦っていたのです。

私たちに必要なのは、待つことです。イザヤ書には、迫り来るアッシリヤ軍に対抗するために、エジプトと軍事同盟を結びに走るユダの姿を神が叱責しているところがあります。「神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」しかし、あなたがたは、これを望まなかった。あなたがたは言った。「いや、私たちは馬に乗って逃げよう。」それなら、あなたがたは逃げてみよ。「私たちは早馬に乗って。」それなら、あなたがたの追っ手はなお速い。(イザヤ 30:15-16)」主は、エルサレムを包囲するアッシリヤ軍 18 万 5 千人を、一夜にして、主の使いをもって打ち倒されました。朝起きると、そこは死体の山でした。けれども、そこまで追い詰められなければ、彼らは主を待たずして、馬に乗ってエジプトの援軍を期待していたのです。

私たちが周りを見て、「何かをしなれば！」と思った時にいったん待ってください。何かをしなればいけないとそわそわ焦る必要はないのです。私たちができることは、神の恵みを受けて、神の御霊に導かれることだけです。そのためには主を待つことです。そうすれば、主がその時の助けを与えてくださいます。そして次にすべきことを示してください。そしてその示してくださったことをことごとく行なうのです。

4B 憐憫

そして四つ目に、バアル信仰の特徴は「憐憫」であります。哀れな姿しか残りませんでした。「このようにして、昼も過ぎ、ささげ物をささげる時まで騒ぎ立てたが、何の声もなく、答える者もなく、注意を払う者もなかった。(29 節)」結局、何も残りません。周りが反応しなくなるのです。それで、自分が何と哀れなのかと、自己憐憫に陥ります。自己憐憫というのは、自分の高慢を保ち続ける良い方法です。問題が起こると、いつまでも自分以外の他のものを責めます。そして自分がいつまでも正しいと思ひ込んでいます。そのために、周りが相手にしなくなります。そして相手にしなくなったときに、主に立ち返るのではなく、自分がいかに可哀想なのか、と嘆くのです。

ですからバアルの預言者は、初めに目立つことを行ないました。けれども、次に役に立っていないことをうすうす自分で分かってきます。それから、焦り、衝動に駆られます。最後に、自分が何と

哀れなのかと嘆きます。

3A 主の預言者

私たちの祈りや礼拝が、生ける神に向かっている時にはそのようになりません。エリヤがどのようにに対決したかを次に見ましょう。

1B 大胆さ

エリヤの特徴は、第一に「大胆さ」にあります。エリヤの一連の行動のすべてに言えますが、彼がバアルの預言者の後に、どのように行動したか見ましょう。「エリヤが民全体に、「私のそばに近寄りなさい。」と言ったので、民はみな彼に近寄った。それから、彼はこわれていた主の祭壇を建て直した。エリヤは、主がかつて、「あなたの名はイスラエルとなる。」と言われたヤコブの子らの部族の数にしたがって十二の石を取った。その石で彼は主の名によって一つの祭壇を築き、その祭壇の回りに、二セアの種を入れるほどのみぞを掘った。ついで彼は、たきぎを並べ、一頭の雄牛を切り裂き、それをたきぎの上に載せ、「四つのかめに水を満たし、この全焼のいけにえと、このたきぎの上に注げ。」と命じた。ついで「それを二度せよ。」と言ったので、彼らは二度そうした。そのうえに、彼は、「三度せよ。」と言ったので、彼らは三度そうした。水は祭壇の回りに流れ出した。彼はみぞにも水を満たした。(18:30-35)」彼は、あえて水をいけにえの上に注ぎかけさせました。それが、祭壇のみぞに水が満ちるほどにいっぱい水をかけさせました。このことによって、このいけにえが燃やし尽くされるときに、あきらかに神が生きておられることを示すためでした。

なぜこのような大胆な行動を取ることができるのでしょうか？彼には生ける神に対する確信がありました。それは、ただ神がこのことをおできになるということだけではありません。何でもおできになる神が自分に敵対するのではなく、自分を責めるのではなく、むしろ自分を愛し、自分の味方をしてくださっているという確信です。「愛する者たち。もし自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に出ることができ、また求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行なっているからです。(1ヨハネ 3:21-22)」

大胆というのは、自信過剰になることではありません。大胆の元々の意味は、「恐れから自由にされている」ことを意味します。人々が自分の発言や行動に対して批判を加えるのではないか、外からの圧力が増すのではないかなど、そのようなことを気にして自分の言動を控えるのではなく、主が語られたのだからということで、あるいは主が示されたからということで、そのまま行動に移すのです。もし私たちが心に責められることがなければ、良心をきよく保っていることができるのであれば、主が豊かに報いてくださることを知っているのです、それを、勇気をもって行なうことができるのです。

もし、その大胆さがない、その力が出てこないというのであれば、それは静かに主を持つ時であります。そして、自分を振り返って、自分のあり方、自分のありのままの姿を主にあって調べてい

ただく時です。そして自分を低くするときに、主が恵みをもって臨んでくださいます。「しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」(ヤコブ 4:6)」その時に自分には深い確信が与えられます。自信が与えられます。主が共におられるという自信があるのです。

2B 静かさにある力

そしてエリヤの祈りまた礼拝には、第二に、「静かな力」があります。あのバアルの預言者のような騒がしい、目立つ祈りではなく、短くとも力強い祈りがありました。「ささげ物をささげるところになると、預言者エリヤは進み出て言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなたのしもべであり、あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行なったということが、きょう、明らかになりますように。私に答えてください。主よ。私に答えてください。この民が、あなたこそ、主よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださることを知るようになしてください。」(1列王 18:36-37)」

エリヤは、三つの点で確信ある祈りを行ないました。一つは、神が約束と契約の神であるということです。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ」と呼びかけています。神がアブラハムに何をしてくださったのか、イサクに何をしてくださったか、そしてイスラエルあるいはヤコブに何をしてくださったのか、エリヤはよく知っていました。約束を必ず守る方であることを彼は知っていました。事実、彼はその真実を、パンと肉を持ってくる鳥と、シドンの女を通して体験的にも知っていました。そこには静かさがあります。焦りがありません。もう主を知っているのだから、焦って注意を引いてもらおうと叫びだす必要はないのです。

もう一つは、自分が主のしもべである、ということです。「あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなたのしもべ」と言っています。エリヤが、自分が神から召されたことを知っていました。自分が好きで預言を行なっているのではなく、主が命じられたから預言を行なっているのを知っていました。そして、主が命じられていることをことごとく行なうのです。そこに、するかしないかの選択肢はありません。ただ、主が命じられたことを自分の思いを退けて行なったのです。この徹底的な従順と服従に、実はとてつもない力が秘められています。何か自分が目立つことをするから、大きな力が出てくるわけではありません。この地味な作業にこそ、力があるのです。

そして、もう一つは、主の御言葉の確かさです。「あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行なった」とあります。聖書に書いてあることを見て、「私だったら、こうしてみるのに」という考え、思いがあるなら、そこには神の御言葉の権威への不信仰があります。神が語られたのだからそれは絶対なのだという心の明け渡しがあれば、主の御言葉の確かさを見ることができます。「こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。(1

テサロニケ 2:13)」

3B 従順にある徴

そしてエリヤが祈った後に、38 節です、「すると、主の火が降って来て、全焼のいけにえと、たきぎと、石と、ちりとを焼き尽くし、みぞの水もなめ尽くしてしまった。」主が、エリヤの従順に対して徴を与えてくださいました。どうか、ですから、神のしもべに徹してください。神を知ってください、単に知識で知るのではなく、自分をキリストの十字架に持って行って、自分を捨てて神を知ってください。そうすれば、エリヤのような確信に満ちた、また神の真実の確認をするような生活をすることができます。

4A よろめく民

そして民は、「ヤハウエこそ神です。ヤハウエこそ神です。(29 節参照)」と言いました。よろめいていた民が、ヤハウエに自分の立ち位置を得ました。エリヤが、「あなたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。」と言ったときに、「民は一言も彼に答えなかった。(21 節)」とあります。どちらかにしなければいけないと知りつつも、それを行なわないときに、口を閉ざしてしまうのです。だまってしまうのです。口を開かないことは、大声でしゃべっていることと同じです。「私はあなたの言うことを聞きません。あなたこそ、その口を閉じてください。」と言って反抗していることに他なりません。口を開くときに、そこから心の瓦解が起こります。心が崩れて、そして、主の前で子どものようになつて祈ることができるのです。